"アジア諸国へ目を向ける"と 実践研究の要点

馬居 政幸
(静岡大学)

一 国境の町で

昨年十月初旬、北京から約一千キロ離れた北朝鮮との国境に近い中国吉林省の延辺朝鮮族自治州にある延吉市を訪れた。その中心街にある公営書店で経験した、日本人としてのアイデンティティの揺らぎについて述べることから課題に答えたい。

私は現在「韓国における日本大衆文化の調査研究」(科学研究費)をテーマに韓国で継続調査を実施している。日本文化を禁止する韓国で、日本マンガのハングル訳が数十万単位で売られる事実に興味をもったからである。それを東アジア全体に広げるための予備調査として中国を訪問した。

だが北京から遙か離れた、それも日本が侵略した地に半島から移住してきた(日本の強制も含めて)人達の中心都市である。ここには日本のマンガはないだろうと思いつつ書店を訪れた。期待はみごとにはずれた。入ってすぐの最も目立つ場所に見慣れた絵があった。ジャンプの「ろくでなしBLUES」中国語版?の平積みである。

こんなところにまで来て日本のマンガを見つけて喜ぶ日本人は私だけかなと、変な優越感?に浸りつつ、他のマンガを求めて子ども用の本棚にあった冊子を手にとって驚いた。ハングル(朝鮮語)の「力道山」のマンガ物語、しかも北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)で作られた本であった。

力道山はアントニオ猪木やジャイアント馬場の師匠で日本のプロレスを築いた人。次々と米国の巨人なレスラーを空手チョップでなぎ倒す力道山の姿に、敗戦で失った日本人としてのアイデンティティを取り戻した人は多いはず。敗戦から高度成長時代へと転換する時代に最も力強く生きだした日本人の代表が力道山ではなかったか。

だが実は彼は現在の北朝鮮から渡ってきた人であった。その一代記が中国の朝鮮族自治州の書店の子どもの本棚に並んでいたわけである。私は複雑な気分になった。

力道山が半島の人であった事実は既に日本では様々な機会に語られている。だが戦後の混乱期を生きた人にとって、力道山は

今でも「リキさん」の愛称とともに尊敬と憧れの日本人ではないか。少なくとも多くの日本人が彼の戦う姿に勇気を得て、現在の日本の豊かさを築いてきたはず。とすれば、その豊かさを日本国と日本人の成果であるとする私も含めた現在のこの国に籍を置く人達にとっての日本と日本人のアイデンティティとは何なのか。

これが私とまどった理由である。

二 自国と他国のあいだ

国際化への対応は自国認識を基盤としてこそ可能といわれる。この考えには異論はない。だが忘れてはならないのは日本という枠組みを構成する要素自体に東アジアの世界がわがちがたく入り込んでいること。

自国認識とは具体的に何を認識することなのか。まず最初に浮かぶのは、もののあるわれ、わび、さび、といった日本固有の情緒様式を表現する概念やその背後にある文化様式、あるいはそれらを一定の形式で表現した作品ではないか。より単純に古代国家形成期以来の政権交代史にかかわる事象の認識、という答えかもしれない。少なくとも小中学校の社会科教科書をみれば、日本の義務教育で教えられる自国認識に相当する部分の多くが、このような知識で構成されていることを否定できない。

だが、これらは東アジアの沖合にある列島の一部を舞台に、ある時代の特定集団を担い手として生起した事象にすぎない。そ

の人達のアイデンティティが日本という枠組みと結びついてきたかどうかも定かではない。大陸や半島である可能性も高い。何よりもこれらを記録した文字は大陸で創造され、半島に住む人たちに教えられたものが原型である。このことを典型に、先の事象は陸や海をへて移動してきた。ヒト、モノ、コト、との関係を除いて語れない。

さらにこれは優れて現代の問題。香港返還の翌日、タイの通貨切り下げに始まる金融危機が昨年末に韓国経済を破産寸前に追い込んだ際に、日本政府は全力で支えざるをえなかった。それにもかかわらず、欧米諸国からアジアの金融危機は日本の経済政策の誤りとの批判が繰り返されている。その当否は別として、これらの事実が日本という国に生活する人にとって、アジアを構想する国々との関係を考慮することなく自国認識は成立しないことを示している。

半島から訪れ、現在の豊かさを築いてきた勇気を与えてくれた力道山の物語が、いまこの国の内外に次々と生まれているといえまいか。ただしそれは日本人としての自国認識をアジアの他の国の認識に拡大することではない。これが延吉市の書店で感じた揺らぎのもう一つの理由である。

三 国家と自己のあいだ

ここでの自国認識とは、十八世紀から十九世紀のヨーロッパに生じた変動に起因する、一民族一国家という近代国民国家の

枠組みが前提。だがこの理念が実現したかにみえた二十世紀後半の世界に実際に誕生したのは多様な言語、文化、宗教をイデオロギーの帯で強制的に束ねた多民族国家であった。さらに、これらは東西冷戦の終焉による拘束の正当性の崩壊により、再び様々な次元で解き放たれた。二十一世紀を目前に世界は改めて秩序化への道を模索する再編期にある。アジアも例外ではない。

このようないま、ここで、という観点からアジアへの視点を位置づけるなら、最も重要なのは近代日本国家誕生期以来、百数十年かけて作られた、一民族、一言語、一文化という神話から自由になること。ただし、それは日本国というフレームが不必要というのではない。逆である。冷戦終了後の世界の流動化と再秩序化への要請こそが、日本の国の輪郭を顕在化させる。

私も含め現在の大多数の日本人は日本人であることを主的に選択したわけではない。たまたま生を得た地と命をくれた男女に与えられた戸籍という仕組みが、日本人というカテゴリーに分類することを強制したにすぎない。他のアジア各国の人々と比較すれば、このような自己(自国)認識はかなり特異である。冷戦システム下では有利に機能する場合もあったが、他国(人)との関係が日常化する世界では、自己(自国)認識の欠如としてみなされる。特に建設途上のアジア諸国からは自己本位(エゴ

イズム、無責任)ととらえられよう。

それゆえ、今後はこのような国家という制度で人間の集団を枠付ける仕組みを、一人一人が改めて自覚的に受容(拒否)もしくは再構築できる契機(仕組み)を意図的に準備する必要がある。もちろん、それはいつかまた道に戻ることはない。逆である。今なお様々な社会制度や社会意識に潜在する、旧来の国家観や人間観を脱するためにこそ必要である。その意味で、まず国という仕組みを個々人の日常から離れた形而上学的な実体としてでなく、あくまで自己を構成する社会的要素の一つとして定位すること。いいかえれば、自分の外にあって誇りや非難の対象となる世界としてではなく、自分が創りうる対象として位置づけること。これが変化流動するアジア諸国の今を読み取る必要条件であり、「総合的な学習」が挑む世界と考える。そして十分条件は教師自身の自己改革。その実践化へのポイントを三つ指摘したい。一つは既存の知識を教える職業という神話から自由になること。二つは日々創造される情報の意味づけと格闘する醍醐味を味わうこと。三つは多様性と可変性が常態化するアジアと自国の認識枠組の再構築に挑戦すること。詳細は拙著「アジアをどう教えるか」(平成九年度「現代教育科学」連載①)②再構成後出版予定)を参照いただきたい。

「基準の改善のねらい」からみた

総合的学習研究の課題—無藤 隆

生活科の「現状と課題」で指摘されている

事項をどう考えるか—日台 利夫 10

生活科と他教科との総合的な指導研究の要点

生活科と国語科との総合的な指導研究の要点	大槻 和夫	15
生活科と社会科との総合的な指導研究の要点	有田 和正	18
生活科と算数科との総合的な指導研究の要点	長崎 栄三	21
生活科と理科との総合的な指導研究の要点	斎藤 實	24
生活科と音楽科との総合的な指導研究の要点	吉田 孝	27
生活科と図工科との総合的な指導研究の要点	若元 澄男	30
生活科と体育科との総合的な指導研究の要点	土谷 正規	33
生活科と道徳との総合的な指導研究の要点	立石 喜男	36
生活科と特活との総合的な指導研究の要点	高階 玲治	39

生活科の「改善の内容」をQ&Aで説明

「地域の自然の活用」と実践研究の課題	藤田 静作	42
「地域の施設の活用」と実践研究の課題	野田 敦敬	44
「幼児との触れ合い活動」と実践研究の課題	布谷 光俊	46
「高齢者との触れ合い活動」と実践研究の課題	斎藤 勉	48

「総合的な学習の時間」にかかわる課題」と実践研究の要点

● 国際化への対応。にかかわる課題と実践研究の要点

「異文化理解」と実践研究の要点	西村 公孝	54
「異文化交流の能力育成」と実践研究の要点	佐藤 仁	56
「アジア諸国へ目を向ける」と実践研究の要点	馬居 政幸	58
「英語」コミュニケーション能力の育成」と実践研究の要点	影浦 攻	60
「外国の生活や文化に親しむ活動」と実践研究の要点	椎名 仁	62
「外国の体験活動」と実践研究の要点	垣尾 幸博	64

● 情報化への対応。にかかわる課題と実践研究の要点

「小学校・コンピュータの活用」と実践研究の要点	水越 敏行	66
「中学校・コンピュータの活用」と実践研究の要点	村端 五郎	68

● 環境への対応。にかかわる課題と実践研究の要点

「環境やエネルギーへの理解を深める」と実践研究の要点	向山 洋一	70
「環境を大切にすることの育成」と実践研究の要点	飯田 稔	72
「環境の保全・創造への行動」と実践研究の要点	佐長 健司	74
「環境の調べ学習」と実践研究の要点	湊 秋作	76
「環境の問題解決的な学習」と実践研究の要点	寺本 潔	78
「環境の作業的な学習」と実践研究の要点	笠原 始	80
「環境の体験的な学習」と実践研究の要点	山田 卓三	82